

Face to Face

TICOは徳島発！保健医療・農村開発などの分野で、アフリカ・アジアで支援活動を行っている国際協力NPO法人です。

地球規模の問題に苦しむ人たちの自立支援を共同作業により実施し、そこで学んだ経験と知識を地域の人々とわかち合い、私たち自身のライフスタイルを振り返るとともに、地域の精神文化の昂揚に寄与することを目的としています。

TICO 季刊ニュースレター

No.43 2016年4月号

ザンビア

母子保健プロジェクト

モンボシ・ムワブラ両地域での進捗状況について、報告します。

☎p.2-4

ザンビア募金

皆様からご支援いただいた寄付金の用途について、2015年度の活動を写真で振り返ります。

☎p.5-6

TICO奨学金（学費）支援

2016年度も引き続き学費支援を行う予定です。ご支援、ご協力のほど、よろしく申し上げます。

☎p.6



モンボシ地域にある学校の校長先生3名が来日した際の記念撮影。右から2番めは代表の吉田（8ページ参照）

チサンバ郡 総合的な農村母子保健を支える "地域力"強化事業



教材である絵カードを使用しながら研修を受ける受講生たち。

SMAG*養成研修

村上 久子（事業モニタリング【地域・行政間連携強化】）

本プロジェクトの対象地域であるモンボンとムワブラ地域のそれぞれの住民保健委員会で選ばれた合計32名（ムワブラから13名、モンボンから19名）を対象に、SMAG養成研修を実施しました。ムワブラ地域では昨年の12月16日から20日まで、モンボン地域では今年の1月11日から15日まで、それぞれ5日間にわたって実施しました。

SMAG養成研修は、国家資格を持った講師が主導で教える必要があります。しかしながら、ガイドラインが2015年に改訂されたばかりのため、本事業地を管轄するチサンバ郡では講師が見つからず、チサンバ郡の上位保健局であるカブウェ州保健局に相談に行き、講師を紹介してもらうことから準備が始まりました。そして、チサンバ郡でも研修の講師を務めることができるスタッフを養成するため、研修講師養成研修を実施しました。その結果、新しく養成されたチサンバ郡保健局のスタッフとカブウェ市郊外ムクシ郡保健局のスタッフ（国家資格保持者）の2名で、無事に前述のSMAG養成研修を行なうことができました。

研修では、実際に村で行われる集会を想定し、椅子を円形に並べ、講師もその円の中に加わります。そして、トピックごとに村の集会で話し合いが行なわれている、という設定で学んでいきます。

例えば「妊婦や出産後42日までの女性に問題が起こったら、一刻も早く医療施設に行き死亡につながるのを防ぐ」ことについて学ぶセッションでは、次のような流れになっています。妊婦を早く医療施設に連れて行って助かったケースや、遅すぎて助からなかったケースについて、講師が時系列に並んだ絵カードを使用して物語を語ります。

「ナターシャの場合：これはナターシャです。ナターシャは女の子2人と男の子2人合計4人の子どもがいます。彼女はもう子どもは欲しくありません。でもどうすればいいのかわかりません。夫は農民で一家は町から遠く離れた村で暮らしています。ある日の朝、ナターシャは出血していましたが、それが何なのか分からないため誰にも言わず・・・」

読み終わると、講師は絵カードの内容を再度確認して実際の体験に重ね合わせ、危険兆候の早期発見の重要性を認識させていきます。

具体的には、SAY & DO DEMONSTRATION（セイ アンド ドゥ デモンストレーション）というコミュニケーションツールを使って、言葉のメッセージをジェスチャーなどで表現します。読み書きが十分にできない人々が多いへき地の村などで、妊婦や新生児の健康問題への意識を高めるのに効果があるのだそうです。本研修では8つの妊産婦危険兆候、9つの新生児の危険兆候、そして5つの安全な妊娠・出産計画行動という3種類の啓発内容について、教科書にある英語を自分たちの地域の言葉（トンガ語）に訳し、暗記するまで何度も練習しました。

研修最終日には、村での活動に影響力を持つリーダーを招待してSMAG養成研修修了会議が行なわれました。研修で学んだ危険兆候と安全な妊娠・出産計画行動のデモンストレーションの後、出席した村長から村全体で妊娠・出産を支援することが宣言され、5日間のSMAG養成研修が終了しました。

*スマッグ：Safe Motherhood Action Groupと呼ばれる安全な妊娠/出産を支援するための地域住民によるボランティア

チームが成長する瞬間

子育て経験のあるお父さんお母さん、学校や習い事の先生、職場の新人教育担当の方などは、思いもかけず人が急激に成長する瞬間を目の当たりにしたことがあるかと思います。そんなときは驚きとうれしさと同時に、自分の手を離れていく一抹の寂しさを感じるものです。今回は、TICOが育ててきた住民保健委員会の一つ、マケニ住民保健委員会のそんな成長の話です。



▲自主勉強会で新生児の危険兆候について復習しているマケニの住民保健委員会。黒板の前に立つのはSMAG(2ページ参照)のメンバー。

村の母子保健はボランティア頼み

TICOが活動しているモンボン地域には20余りの村があって、推定2万人の人々が住んでいます。いくつかの村毎に住民保健委員会という組織が作られていて、地域全体で10の住民保健委員会があります。委員会の定員は15人で、皆ボランティアとして活動しています。活動内容は、月例会議、5歳未満児・妊婦健診（出張健診）、戸別訪問、啓発活動、診療所への報告書提出など、多くの時間と労力と知識を要しておよそボランティアの範囲を超えているものです。しかし、このようなボランティアに頼らないと、農村部の保健医療が立ちいかなくなるのがザンビアの現状だと言えます。さて、無報酬で多大な業務を担う住民保健委員会は、必要な人員数を確保するだけでも大変です。好んでボランティアになる村人は極少数です。継続してくれるボランティアはさらに稀です。定員は15人でも、実際に活動するのは4-5人にも満たないというのがこれまでの実情でした。そして、それでは村の母子の健康を担う十分な活動はできないのです。

ボランティアを活性化するキーワード

私たちTICOは、2014年4月以来の母子保健事業の中で住民保健委員会の強化を図ってきました。これは非常に難しい問題ですが、ボランティアである委員会メンバーたちと話し合いを重ね、試行錯誤するうちに一つのキーワードが浮かび上がってきました。それは、「役割分担」です。これまで多くの場合において、「読み書きそろばん」ができる一握りのリーダーだけが委員会の業務の全体像を把握していて、それができない他のメンバーは言われるがまま、一部の作業を手伝うのみだったのです。そこに、問題解決の糸口があるのではないかと考えるようになりました。そこで、私たちは皆が業務の全体像が見えるようにして、コミュニケーションを促進し、積極的に責任を割り振る「仕組み」を整えていきました。

杉本 尊史（保健医療専門家）

診療所の医療スタッフをその仕組みに取り込みました。事業が開始されて約1年半、この取り組みがようやく一つの実を結び始めます。それがマケニ村の住民保健委員会です。

想像を超えた成長

柔和な顔のマケニの女性委員長テクラさんは、私たちの意図をよく理解してくれた上で、さらに自分たち独自で「役割分担」を推進する仕組みを作り上げていきました。それによって活動するボランティアの数を増やしただけでなく、村での病気の予防という本来の業務の質も向上させていました。マケニの委員会が毎月診療所に報告する内容は、いつも他の住民保健委員会の注目を集めています。自他共に認めるベストチームです。

私たちは、2015年10月11日と今年1月の3回に渡って、マケニ住民保健委員会が実施する5歳未満児・妊婦健診を、他の住民保健委員会メンバーに見学してもらうツアーを企画しました。20人に及ぶマケニのメンバーが組織立って手際よく健診業務をこなす様子に、見学者たちはたちまち大きな感銘を受けていましたが、最も感動が大きかったのは私自身だったかもしれません。見学した後の意見交換の場で、マケニのボランティアたちは自分たちの「仕組み」を堂々と皆に公開していました。互いに教え合う仕組み、役割をローテーションする仕組み、業務を円滑にする仕組みなど、その内容は極めて先進的で私の想像を大きく上回るものでした。

サラさんの言葉

マケニのボランティアの一人、サラさんは言います。

「私は2005年から委員会に加わったけど、健診ではやることなく、手伝いたくても手伝わせてもらえなかった。でも勉強会に参加して、当日の実際の作業にも加えてもらって、今は参加するのが本当に楽しい。これまでは住民保健委員会って何なのかよくわからなかったけど、今は何をやっているかが分かるようになった。次はカウンセリングや集計の仕事も勉強したいから、テクラ委員長に再度勉強会を開いてもらえないか要望を出している。ボランティア（無償の仕事）ではあるけど、知識は力だと思う。」



マケニの委員長テクラさん。彼女が話をするときは、誰もが自然と耳を傾けます。

マケニ住民保健委員会は、驚異的な成長を見せてくれました。その成長ぶりを見ると、私たちTICOはほとんど何もしていないのではないかとさえ思えます。今後はさらなる成長を横で見守りながら、第二、第三のマケニの登場を願いつつ、ボランティアたちと試行錯誤を続けていきます。

瀬戸口 千佳（コミュニティ活動専門家／業務調整員）

ムワプラ後輩の追い上げ



モンボシではマケニという輝かしいチームが生まれていますが（3ページ参照）、ムワプラ後輩（会報第42号（2015年11月発行））もこの1年で大きく成長しました。その彼らのがんばりを後押しするために作成したのが、この左のカレンダー（A2サイズ）。

ムワプラ診療所管轄下にある6つの住民保健委員会の集合写真と診療所スタッフの写真を配し、右下にはチピモ日程（例：ニャンカンガ地区は第1水曜日）を掲載しています。チピモとは、現地語で「母と子」を意味し、多くの母子が集まる出張健診のことも「チピモ」と呼ばれます。

カレンダーの上部にLet's go to Chipimo「チピモに行こう!」とあるように、このカレンダーはより多くの人たちがチピモの重要性と、その実施を担う住民保健委員会の存在意義について理解してほしい、という思いが込められています。

チピモ（出張健診）では、5歳未満児健診、妊婦健診、家族計画の3つのサービスが行われますが、なんといっても対象としての数が多いのは子どもたち。最も大きな住民保健委員会では毎月200～300人の子どもたちの体重を測り、成長具合を確認しています。

ではこの1年でムワプラ後輩は、どれくらいの数の子どもたちを計測したのでしょうか。

期間	2015年 1～3月	2015年 4～6月*	2015年 7～9月	2015年 10～12月*
計測した5歳未満児の数 (3か月ごとの累計)	315	478	968	1,665
5歳未満児カバー率 (推定)	9.5%	14.4%	29.2%	50.2%

出典：チサンバ郡保健局

※大まかな傾向を見るために、3か月ごとで区切っていますが、出張健診は毎月各住民保健委員会で実施されています。

ちなみにモンボシ先輩の成績は以下の通り。

期間	2015年 1～3月	2015年 4～6月*	2015年 7～9月	2015年 10～12月*
計測した5歳未満児の数 (3か月ごとの累計)	2,384	4,211	2,276	5,348
5歳未満児カバー率 (推定)	30%	53.1%	28.7%	67.4%

出典：チサンバ郡保健局

*ザンビアでは6月と12月の年2回、子どもの健康週間という全国キャンペーンが展開されるため、その時期の数字は通常より増加する傾向があります。

モンボシは数の上ではムワプラを圧倒していますが、パーセンテージを見るとムワプラ後輩のがんばりを分かっていただけのはず。

このムワプラの成果はひとえに、診療所スタッフと住民保健委員会が、自分たちの地域で定期的に出張健診を実施してきたという事実の積み重ねです。毎月決められた日に、必ず同じ内容のサービスが実施される、とお母さんたちに信頼されなければ、こうして順調に数字を伸ばしていくことはできません。そして地域の人たちに信頼されなければ、診療所には患者として行きませんし、住民保健委員会に健康のことで相談にも行きません。地域に確実に母子保健サービスを届けるには、地域からの信頼を得ること、そして裏切らないこと、それが第1条件です。

さて、出張健診は改善が見られる一方で、施設分娩の数は低迷しています。地域全体としては3か月で70件のお産があると推定されているので、残りはリスクを伴う自宅での分娩が多数を占めることとなります。

期間	2015年 1～3月	2015年 4～6月	2015年 7～9月	2015年 10～12月
施設分娩数 (3か月ごとの累計)	12	8	16	12

そこで、研修を終えて帰って来たばかりのSMAG（2ページ参照）に期待です。SMAGは住民保健委員会に所属する、安全な妊娠・出産推進に特化したボランティアです。SMAGが地域で妊婦健診や施設分娩の重要性を説き、診療所スタッフが確実にサービスを実施することで、こちらも改善が見込まれます。

併せて、分娩室の改装を計画中です。下の写真のような現在の分娩室を改装して、妊婦さんが快適・清潔・安心に過ごせる空間にします。この計画を実現させるために、皆様からのご支援を募っています。（10ページをご覧ください。）



プロジェクト期間はあと1年ほどですが、ムワプラ後輩の追い上げを信じ、引き続きの応援をよろしくお願いいたします。

- 2014年4月から開始されている本事業は、JICA（国際協力機構）から「草の根技術協力事業」として委託を受けて実施しています。

ザンビア募金

写真でみる2015年☆3

柳下 優美（業務調整員）

早くも、2016年が始まって約4か月が経ちました。2015年度も終了ということで、今回は2015年度の活動を写真で振り返ってみたいと思います。

家畜薬浴槽ディップタンク建設プロジェクト

牛を感染症から守るために村人が主体となって建設が進められている本プロジェクト。2013年に工事を開始してから2年経ち、やっと完成が見えてきました。昨年12月には、行政（畜産局）が有志からなる運営委員会を対象に研修を行い、公式に運営の許可が下りました。施設の補修が終われば、いよいよ運営に向けた準備が始まります。



▲屋根が完成！



▲レンガ積みが終わわり、壁をセメントで塗る工事も終了。



▲研修にて、牛の感染症やその見分け方を中心に学びました。

学校校舎修繕プロジェクト

高松市の公益社団法人セカンドハンド*から教育支援の資金協力を受け、学校の修繕工事を行っています。ムエンバ・プライマリースクールは昨年11月に作業が完了し、12月3日完成式典が催されました。

*ムエンバ・プライマリースクール



▲窓は無く、屋根には穴、床もセメントが崩れていました。



▲修繕作業が完了！



▲完成式典のようす。

*セカンドハンドは主にカンボジアの教育や医療支援などを行っている国際協力団体です。

*カムロブエ・コミュニティスクール



▲机や椅子が無く、土埃の舞う教室でした。



▲窓枠が取り付けられ、床の工事が完了しました。



▲これから屋根組の工事に入ります。

橋の建設プロジェクト

雨季になると、増水のために渡ることのできなかったモンボシ川ですが、NPO法人「道普請人」の協力の下、車も通れる立派な橋が誕生しました。子どもたちや妊婦さんでも、橋を渡って川の反対側にある学校や診療所に行くことができるようになりました。



2015年4-5月

▲コンクリートを作るための石や砂を集めました。



2015年6月

▲完成が目の前に近づいてきました！



2015年6月29日

▲遂に完成！初めて車が通りました！！

ンジョブ村出張健診用小屋建設プロジェクト

現在ンジョブ村では、毎月行われる出張健診を屋外で実施しています。天候に関係なく2時間、3時間と待つことも多く、健診を受けるお母さんと子どもにとっては、参加すること自体が大きな課題となっています。このシェルターが完成すれば、雨の日でも濡れることなく健診を受けることができます。



2015年4月

▲窓・ドア枠の上の壁を作る作業が始まりました。



2015年9月

▲屋根を支える部分の壁作りに入りました。



2015年11月

▲屋根を支える壁がもう一歩で完成！

2016年度TICO奨学金（学費）支援事業が始まります！！

TICOが2013年に始めた8、9年生（日本の中学2、3年生に相当）への学費支援も、4年目を迎えました。初年度は8、9年生から各5名ずつの支援でしたが、2014年からは15名ずつの支援へと、支援の幅が広がりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

ザンビアの義務教育は、日本と同じく9年間。ユニセフによると、ザンビアでは一人の女性が一生に産む子どもの平均数が5.7人のとの統計が出ています（2012年統計）。モンボシ地区では、約9割の住民が農業で生計を立てており、そのほとんどが自給自足で生活しています。そのため、現金収入が少なく、5人、6人の子どもたちに等しく教育を受けさせることは容易ではありません。事実、学年が上がるごとに生徒数は減少する傾向にあります。両親・片親が様々な事情でおらず経済的に困窮している学生も珍しくありません。一方で、学費は年々値上がりしています。2014年の5,400円／年から2015年は8,000円／年、そして今年は約10,000円／年という上昇ぶりです。

本事業では、成績も良く勉強の意欲はあるが家庭の事情により継続して学校へ通うことが難しい生徒の中から、奨学生を選んでいます。今年度も、モンボシセカンダリースクールに通う新8年生、9年生からそれぞれ15名ずつ、計30名の学費支援を予定し、現在選出のための面接を進めています。

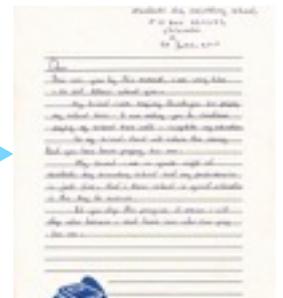
1口 3,500円

※約1割は管理費（生徒の選出や家庭状況確認等学校側との打合せにかかるスタッフの person 費、ガソリン代等）に充てさせていただきます。



奨学生のジャスティン君

2口以上ご寄付をいただいた方には、奨学生から直筆のお礼状が届きます♪



一人でも多くの学生が教育を受けられるよう、モンボシ地域の未来を担っていく新8年生、新9年生の30名の支援を宜しく願います！！

「学費支援」とご指定の上、ご寄付ください。ご寄付の方法は巻末のページでご案内しています。

環境教育の実践研究～これまでの取り組み～

近森憲助さん（鳴門教育大学大学院教育研究科国際教育コース・教授）



▲関係者の前で発表を行うムンバ校長先生。

2013年からモンボシ地区の学校において、どのような環境教育ができるのか、持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）の考え方にに基づき、TICOと連携して実践研究を行っています。今回は、実践研究の成果を共有するとともに、評価について意見交換を行うため、研究協力校の校長を日本に招へいしました。

ンコンジェ・コミュニティスクールのニヨンド先生、マサカ・コミュニティスクールのンコンコラ先生、そして、モンボシ・プライマリースクール・アンド・セカンダリースクールのムンバ先生の合計3名が、1月27日から1月31日までの6日間、徳島県に滞在しました。

到着の翌日には、さっそく徳島県三好市立池田中学校を訪問しました。池田中学校では、2015年に当時の1年生が「水とくらし」というテーマで描いた絵を通じて、今回来日した先生方の学校の生徒たちと交流授業を行っています。学校の施設見学の後、授業参観、生徒や教職員との交流、給食及び清掃活動などを体験しました。

そして、今回の訪問のハイライトである実践研究の成果の共有と評価に関する成果報告会が、1月29日に鳴門教育大学で行われました。日本側研究者からは、実践研究の意図や成果が発表され、その中でモンボシ地域の環境を元にした環境教育プログラムが紹介されました。

また、校長先生たちからは、鳴門教育大学が提案した学校や生活の周りがある環境を教材にした授業は、「教員や生徒が自分たちの周りの環境について関心を持つことにつながった」、「周りにある身近なものが教材に活用できることを気付かせてくれた」などの発表がありました。さらに、ニヨンド先生からは、学校ぐるみの取り組みとして、グリーン・プロジェクトの実践が紹介されました。このプロジェクトでは、校庭に木を植え、生徒たちが当番で水やりなどの世話をしているそうです。その活動は元々やりたかったことではあったが、自分の思いだけでは実現できなかったこと、しかしながら、本プロジェクトを通して教員や子どもたちなど学校全体が環境に興味を持ったことで、この活動を開始することができたとのことでした。この実践研究がきっかけとなって、学校全体で取り組む環境教育活動を後押しすることができたことが、日本側研究者にとっては大きなよこびとなりました。

本事業は、2016年3月をもって一旦終了となりますが、モンボシ地域にもたらされた効果が持続発展していくことを願ってやみません。

短い滞在期間中、学校訪問や意見交換会に加えて、TICO本部への訪問（1ページ参照）、徳島県が主催する「環境教育フォーラム」への参加、温泉体験、鳴門市及び徳島市内の観光などを満喫していました。過密な滞在日程の中で3名の校長先生たちは、寒い日本の冬をものともせず、徳島での滞在を終え、1月31日に無事ザンビアに帰国しました。

ザンビアあるある

日本車編

今回は、猫目線をお休みして【ザンビアあるある】をお届けします！

ザンビアでは、日本車がとても有名！他の途上国同様、いたる所で日本の中古車を目にします。経済成長の後押しにより、日本から多くの中古車がザンビアにやってきました。町を歩いていると、どこからともなく「バックします」と日本語が聞こえてきて驚いて振り向く、なんてことも。ジェットロセンサー2014年9月号によると、日本車の割合はなんと8割以上も占めているとのこと。

そこで、日本人だったら絶対一度は聞かれること。それが、日本車にまつわる質問です。特に多い質問は、カーナビの機能。

日本仕様なので、もちろんナビゲーションはできませんが、日本人以外はテレビモニターだと思っている人が少なくありません。そのため、「DVDが再生できないから再生方法を教えてください」という質問が多く聞かれます。

中でも面白かった質問は、

「エンジンをかけるとなんか言ってるんだ。助けてくれ。」

実際に聞いてみると、

「今日は〇月×日（△曜日）～～～の日です。」

車に何か問題が起こったのでは、と心臓がドキドキしたと話していました。むしろ親切な機能なのに。。

以上、今回は日本人ならではのザンビアあるあるでした。次回のあるあるをお楽しみに♪

▶ザンビアで見かけた日本のトラック
夢と希望も届いています♪



「ザンビアのエネルギー問題」

TICO代表 吉田 修

ザンビアのエネルギー問題には2つの側面があると考えています。

一つは、急速な経済成長、都市拡大による電力不足です。最近、停電の時間が長くなり、計画停電も行われています。ザンビアの電気のほとんどが巨大ダムの水力発電で賄われていますが、需要が急増している上に、降水量が減りダムの水位が低下していることにより発電量が減少しています。また、施設の老朽化も懸念されます。

もう一つは、地方の小規模農家や都市部の貧困層の人々など、電気を使えない状態にある人々の問題です。農村において、通常、調理には薪や炭を使いますが、地域によっては森林の減少で

薪を集めるためにかなりの時間を費やし女性達の重労働となっています。今でもほとんどの農家の調理場は、石を3個置いて3方から薪を焼べ、お鍋を掛ける原始的なものです。それでも大変上手に調理をしますが、燃焼効率の良いかまどや七輪はありません。都市部の人々は薪や炭を購入しますが、値段が高騰しています。

また、ここ数年の間に貧困層にも急速に携帯電話が普及しました。当然、携帯の充電には電力が必要で、ソーラー発電のパネル1~2枚と自動車のバッテリーを駆使して充電する人たちも増えて来ました。

途上国におけるエネルギー問題も無視できない状況ですが、森林の保全、計画的な森林利用、植林、そして、燃焼効率の向上として、かまど・七輪・ロケットストーブの普及など、取り組め

ることがあるのではないかと考えています。

そして、日本と同様に持続可能な自然エネルギーの利用も視野に入れたエネルギー政策をザンビアでも取り入れてほしいものです。太陽光、風力や小規模低落差水力発電など、可能性は無限だと思われます。



よしだ・おさむ：自称兼業農家（外科医）

徳島県出身。アフリカをはじめ世界各国にて国際医療支援活動を実施。現在吉野川市山川のさくら診療所で地域医療を実践しながら、代表としてTICOを運営。

写真は、燃焼効率が良いとされる「改良かまど」かつては日本でも使われ、普及活動が行われている途上国もあるとのこと。

離任のご挨拶

村上 久子

(事業モニタリング
[地域・行政間連携強化])

「2015年のミレニアム最終年をアフリカの現場で迎える」という念願が叶った2回目のザンビア。農村の母子保健を支える現場だけでなく、診療所を管轄する行

政関係者に深く関わる業務だったため、行政と住民ボランティアが会議で直接対話をする場面に立ち会うなど、地域と行政が連携しながら母子保健の問題と一緒に解決をしていくというザンビアの新しい風を感じる経験をしました。

2016年から始まった継続可能な開発の実現に向けて、徳島とアフリカの未来（これから）を作るTICOの活動が今後の明るい未来をもたらすことを心から祈念しています。

短い間でしたが、TICOの活動に貢献できたことを誇りに思います。



▲SMAG養成研修（2ページ参照）にて、受講生、ナースと村上（中央）。

柳下 優美

(業務調整員)

ザンビア事務所で業務調整員として約一年活動させていただき、ありがとうございました。アフリカ大陸に初めて足を踏み入れ、初めて海外で仕事をさせていただきました。最初は、言葉も文化も異なる相手から信頼を得ていくにはどうしたらよieldろうかと悩むこともありました

が、日を追うごとにその悩みも薄れていき、とにかく村の人とともにプロジェクトを楽しむことに集中しました。そして、帰国間際には、一番お世話になったディップタンクの運営委員会から“生きている”七面鳥と鶏をいただき、この機会を次に生かしていきなさいと激励された思いでした。

いつかザンビアに戻り、彼らの笑顔に再会できることを夢見て。



▲ンブドゥ村にて、感謝の印としていただいた“生きている”七面鳥と鶏と共に記念撮影。

事務局長 福士庸二のつぶやき

菜食de国際協力！

みなさん、「野菜」食べてますか？

「野菜を食べるだけで国際協力」ができてなんて、クールだと思いませんか？
いわゆる「寄付つき商品」です。

そんなクールなことが始まっています。

私自身が関わる「さくらファーム」という農場では、平成23年から本格的に有機栽培による野菜の生産に取り組んできました。時間はかかりましたが、ようやく、生産が軌道に乗り販売量も増えてきています。

そこで、今年2月から7月まで「菜食de国際協力！」というキャンペーンを開始。徳島県内の「キョーエイ」各店、関西地域にある「トップワールド」「サンプラザ」「ニシヤマ」といったスーパーマーケットのすきとく市コーナー

で販売した野菜の収益の一部（3%）がTICOに寄付されることになりました。

味自慢の安心安全な野菜を食べて、国際協力！ぜひご利用ください。



さくらファームの野菜たち



▲これが目印！

【さくらファーム】のホームページ
<http://tokushima-sakurafarm.jimdo.com/>

ご支援ありがとうございました

TICOの国際協力活動は、皆様からの寄付金や会費によって支えられています。温かいご支援をお待ちしております。

寄付をいただいた方（書き損じハガキ等含む）

今関英子、原田恵子、ヒラオカ薬局、合同会社PlanB、中田隆子、唐住洲子、さくらcafé募金箱、さくら診療所、増富博子、高松聖ヤコブ教会婦人会、田淵規子、渡部知美、浜垣伊津美、橋本浩一、久保有希、西愛正、加涌由貴、菊谷満子、K's Pet Clinic、吉野川市立森山小学校、南波夏子、中村芳子、ツジヨリコ、武市秀男、新居智次・和世、副島光江、奈良県医療福祉相談室生活協同組合、原井和子、竹岡サヨ子、わらびの会、

田淵幸一郎、近森憲助、杉本尊史、福士庸二、匿名12名

会員を更新された方

加藤恵、笹井美由紀、白石吉彦、田淵幸男・規子、株式会社柚子りっ子、下村俊太郎、浜垣伊津美、長倉聖子、鈴記好博、北島コーポレーション、長野修身、ホウエツ病院、高島百合、三木野博之、砂田、高井美穂、坂東正章、金納千晴、森山庄八、ヒラオカ薬局、中西敬子、寺口カミコ、

岩田祥三、関谷晴孝、松島、饗場和彦、岡真澄、中川朋子、匿名1名

新たに入会された方

森本佳奈、和田るり、森迫ゆり子、中村葵、高橋愛、笠井俊佑、森本桂子、木下厚子

● 2015年12月1日分～2016年3月31日
● 順不同、敬称略

*TICOの会員になってください！

会員となって資金面からもTICOの活動をサポートして下さる方を募集しています。会員の方には、TICOニュースレター“Face to Face”を毎月お送りいたします。

年会費

賛助会員 個人	¥12,000
学生	¥6,000
団体	¥15,000
正会員	¥12,000

※通常は賛助会員でのご入会をお願いします。総会での議決権を持つ正会員を希望される方は事前にご連絡下さい。

入会ご希望の方は、年会費を郵便振替にてお支払い下さい。郵便局備え付けの振替用紙で、次の口座へお願いいたします。

口座番号 01640-6-37649

加入者名 TICO

ご住所・ご氏名（フリガナ）・お電話番号の他に、Eメールアドレスもお持ちでしたら通信欄にお書き添え下さい。

なお、ゆうちょ銀行自動引き落とし、クレジットカード払いも可能です。詳しくはホームページをご覧ください。

*ご寄付をお待ちしています。

郵便振替 — 01640-6-37649（加入者名）TICO

銀行振込 — 四国銀行 山川支店（店番号344）
普通 0199692
特定非営利活動法人TICO
代表理事 吉田修
カナ入力の場合は、(トクヒ) テイコ

指定寄付 — 該当する項目を振替用紙の通信欄にお書き添えください。また、銀行振込の場合は、該当する項目をお知らせください。

- ◆ ザンビア募金 (ザンビア)
- ◆ 学費支援 (ガバ)
- ◆ ムワブラ分室 (ムワブラ)

クレジットカード — ホームページをご覧ください。

(<http://www.tico.or.jp/whatucan/donations/credit/>)

募金箱 — さくら診療所（徳島県吉野川市）に常設しています。

インターネット — TICOウェブサイトのバナー広告をクリックして、そこからお買い物していただくと、代金の一部が寄付されます。詳しくはホームページをご覧ください。

書き損じハガキ — 事務局までお送りください。



TICOニュースレター Face to Face 第43号
2016年4月発行 発行人：吉田 修
編集：近森 由記子

特定非営利活動法人 TICO 事務局

〒779-3403 徳島県吉野川市山川町前川120-4

電話：0883-42-2271（平日 9:30～18:30）

メール：info@tico.or.jp / ホームページ：www.tico.or.jp

フェイスブック：www.facebook.com/ticohq

ブログ：blog.goo.ne.jp/tico_blog

ザンビア共和国



快適・清潔・安全な

分娩室改装プロジェクト募金



ムワプラ診療所

目標

10万円

ザンビア共和国ムワプラ村の唯一の診療所。その分娩室を改装して、妊婦さんが快適に、清潔に、そして安心して過ごせる空間にするプロジェクト。その実現に必要な募金のお願いです。

「診療所がいいとは聞いてたけど、夫は別にいらなくて言うし。私のお母さんも友だちも家で産んでるわ。だから、うちで産んだの。子どもはこの通り元気よ。」

ムワプラ村ではお産は日常の風景です。たいていはお母さんと子どもは元気ですが、一方でたかだか人口6千人のこの村で、お産に伴ってお母さんや赤ちゃんが亡くなっている例を見聞きするのも事実です。

村唯一の診療所には分娩室と緊急時の薬が備わっていて、国家資格を持っている准医師が勤務しています。さらに医療費は無料です。それにもかかわらず、村の妊婦さんのうち診療所でお産をする割合は、わずか17% (2015年推定値) にとどまっています。(4ページ参照) つまり、大多数の妊婦さんは、医療従事者のいない自宅でお産をしています。上のお母さんが言っていることは、大勢の妊婦さんに当てはまることなのです。私たちTICOは、お産のときには診療所に行くことを推奨しています。そのために、准医師と共に分娩室を改装する計画を立ち上げました。

現在の分娩室の様子をご覧ください。(下写真)



計画では、ドアを新調してカーテンをつけてプライバシーを確保します。妊婦さんも付き添いの家族も休めるベッドを購入します。壁をきれいに塗り替え、床にタイルを敷き詰めます。機能的な収納を導入して、緊急時に備えます。お母さんたちが「これなら行ってみようかしら」、お父さんたちが「行かせてあげてもいいかも」と思ってくれるような空間にします。

このプロジェクトが実現すれば、より多くの妊婦さんたちが診療所に来て、安全なお産ができるようになります。これを実現させるために、是非あなたも協力してください。

★ 寄付の方法

振込用紙、又は、以下よりご寄付ください。

郵便振替 — 01640-6-37649 (加入者名) TICO

銀行振込 — 四国銀行 山川支店 (店番号344)

普通 0199692

特定非営利活動法人TICO

代表理事 吉田修

カナ入力の場合は、トクヒ) テイコ

クレジットカード — ホームページからご利用ください。

(<http://www.tico.or.jp/whatican/donations/credit/>)



お願い：寄付先「ムワプラ分娩室」と振替用紙の通信欄にお書き添えください。また、銀行振込、クレジットカード決済の場合は、該当する項目をお知らせください。

❖ムワプラ分娩室 (ムワプラ)